

「Extended (or Cambodian) Mahāvamsa」訳註 (三)

福田孝雄

勝者⁴⁷³は菩提（を得られた）第九月目のプッサ月（Phussa）の満月に、得られた場所からお立ちになり、夕刻時に楞伽島（Lankādīpa）を浄化する為に空中に昇り、空の道を（進み）、師子⁴⁷⁵⁽¹⁾が攻撃する（時のような）優美さをもって天空に輝やき、無限なる仏陀の威厳をもって楞伽島に到り給うた。美しき若芽が繁茂し、最上の花々が咲き乱れ、美事⁴⁷⁶な樹木が生い茂り、太い立派な幹には樹枝が伸び、山は濃い緑（に覆われ）、鬱蒼⁴⁷⁷たる緑の森林と岩石とは平地に濃い影をおとし、蜜蜂たちの羽音はあたりに響き、孔雀⁴⁷⁸や白鷺の鳴声、郭公などのさえずり、美しき地上の宮殿のすばらしき、種々の重閣⁴⁷⁹の群列の輝き、木の根はしっかりと張り、中洲は拡がり、真珠の光耀に覆われた天の床は輝き、地面の草や若草は美しく、（後に建立される）マヒヤンガナ（Mahiyāngana）塔の、その高貴なるガンガの土手には、密林の他処には緑なす吉祥草などの草々が（生い茂り）⁴⁸²（その河には）マニ色の如き

水が流れ、塵も泥土もなく清浄なる砂が敷きつめられ、島に棲む夜叉達の夜叉、羅刹、乾達婆、緊那羅、竜などの星祭の壇があり、そして長さ三由旬、広さ一由旬のマハーナーガ（Mahānāga）と称する心地よい夜叉の園があった。

布薩⁴⁸⁶の日に、その楞伽島に棲む夜叉達の園で、夜叉達の大集會が行われ、（仏の）未だ到達なさらない時に、彼等夜叉達の威力がそこを支配していた。その夜叉達の大集會に善逝は近づき、来集⁴⁸⁸せる夜叉達の頭上の空中に、マヒヤンガナ塔の傘蓋を揚げた場所の虚空にお立ちになり、周囲に六色の光を放ち、網縵のある一方の手で皮の敷具を執って、（それを）海洋の内部のように震動させながら、新たに昇った太陽、優れた悲のお方はユガンダラ（yugandhara）の頂上に姿を現わしつつ立ち給うた。またその時、来集⁴⁹¹せる夜叉達は、彼等の會合に世尊の現われ給うたのを見て、心驚愕し畏怖に襲われた。彼等⁴⁹²のうちのあるものは「大威力ある夜叉はどのよう

にして(ここに)来たのだろうか。或いは大威力ある夜叉大臣なのだろうか」と思った。その時、またあるものは「(彼は)乾達婆(gandhabba)か鳩槃荼(kumbhanda)か、或いは龍か龍の大臣か、或いは羅刹(rakhasa)なのだろうか」と考えた。「仏陀がおいでになったのだ」とは、総ての夜叉達は知らなかった。(仏陀は)彼等の偏って思念したる思念を了知されて、それぞれ⁴⁹⁵の夜叉達に(お姿を)お見せになり、空中の道において種々の恐ろしい相の神変をお示しになった。⁴⁹⁶⁽²⁾世尊はいかにして諸種の神変を示し給うたのだろうか。まずかの主は、最初⁴⁹⁷に四方から大雨と大密雲を集めて、到る所に霰や雨などを降らせ給うた。百千⁴⁹⁸の種類の空を覆う黒雲が沸き上り、牟尼の神通力、威神力はたちまちのうちに夜叉達に雨を降らせ給い、急流の(如き)雨となり大地は咆哮した。またそれから林や樹々などの上の到る所に、時に非ざるに大雨雲が発生した。急流の(如き)雨によって、濡れに濡れた夜叉達の群は、河の水嵩が大いに増し、洪水が目の前の到る所にみなぎって到るのを見て、彼等は驚愕し、恐れに恐れて思うには「あゝまことに我々総てのものはその洪水に覆われて運ばれつつ、この海洋に入って息子や娘や親友と共に滅亡させられるであろう」と。(彼等は)騒ぎ、総てが何度も何度も叫び声を上げた。そして(彼等は)自らの依るべき場所を捜し求めた。次いで守護者は大旋風を起こし給

い、また東方等の破壊の風が発生した。半由旬、一由旬、二由旬、三由旬の高さの山々の頂きが碎破され、風の道すじにあたる樹々はみな根刮になった。到る所の村々町々を打ち碎き破壊するために(風を)起させた。かくの如くかの(主)は大風を起した。守護者は次に、直ぐに岩石の雨を出現させ給うた。大いなる山頂や山々が、また煙を出しながら光を發して夜叉達の上に、空から降ってくるように到る所に落ちてきた。(次に)かの勝者は、武器の雨を出現させ給うた。一方の側から或いは両側から、これ等の槍、劍、突棒など閃めく武器がにわか煙を出しながら夜叉達の上に落ちてくるように、空中の道から到るところにやってきた。大牟尼は(次に)炭火の塘煨の雨を出現させ給うた。それ等とともに煙を出し燃えながら夜叉達の上に、空中の道から落ちてきた。(次に)微細な砂と泥の雨が出現した。それ等は煙を出し燃えながら、夜叉達の上に空中の道から落ちてきた。それから牛王は水を含んだ風を出現させ給うた。骨を破壊する大いなる水を含んだ風が順風、逆風となって四方から吹いてきた。(その風は)夜叉達の肉を髓のように伸張して、震えているように見えた。彼等は寒さに悩まされ、夫々が齒と齒を(打ちならし)製油機のような、或いはバターを造る機械の輪が回転するような音を間断なくたてて、世界中間の地獄の有情のようであった。発生した寒さに悩害された彼等夜叉達

は散り散りになり、自らの息子や娘や親族達の夫々の生命を護ることができないと思うのであった。再びまた大悲者、勝者は直ちに寒風を（彼等の）上に（吹かせ）厚い覆いのような黒雲や大煙塵をもって暗黒（の状態）を出現し給うた。手や足などの肢体を夫々伸ばしても、大いなる暗黒では何も分らず、総ての夜叉衆は大いに恐れた。守護者はその後、その自らの神通によって大暗黒を出現させ給い、威力を破壊されたかの夜叉達は、夫々見ることが出来ずに到る所で大声で叫んだ。かの（守護者）はその間に大風雨を出現させ、四方から大雨を降らせ給うた。到る所の大きいなる山頂や大山やまた樹木も根を引き抜かれ、夜叉達の上に落ちるようになり、面前に（降りそそいだ）。その時百の場所、千の場所から雷光が閃き諸方に散った。楞伽島の到る所の大海で、四方からの風によって刹那に波の泡が渦巻き、泡環が聚って現われ、動揺し声をあげるのであった。また大地も水もともに震動し恐れるのである。須弥山（Sinerumaga）王は刹那に（風の吹く）方向に、よく湿った葦の若芽のように下に曲った。大なる雷電の音が空中に起り山々はぶつかり合いながら、その刹那にそれ等の大地の破壊の音が、大きく響き渡った。刹那に世界中間の地獄に入ったように、総ての夜叉群は仏陀の威光により打ち砕かれて、恐れ、自らの師はなく帰依所も見ることなく、夫々が大きい悲泣して「この夜叉は一体どうして大威力を具

えているのだらう」と考えた。十力者を見ない（夜叉）達は、無畏を求めて『天王よ、大偉力（者）よ、我々総てのものをここなる畏れより解放して下さい。今日、我々は貴方様のおみ足を礼拝いたします。』（と言った）。師は（その）語を聞き給いて、『友、夜叉達よ』と彼等に申されるには、『総ての禍が生じたる時に、わたしには今、力が有り、わたしには強力な破壊の力が有る。汝等怖畏すること勿れ』と。『わたしにはまた良き安住処は（ここには）無い。もしここに安住すべき一つの場所をわたしが得たならば、今この汝等の総ての怖畏を和らげるであらう。更にまた、もし汝等がわたしに坐るべきその場所を与えるならば、今日汝等のこの怖畏を駆逐し排除するであらう。さあ汝等その原因を知るべし』と、かくの如く言われたが、かの世界の救主のようなお方を、この楞伽島に住する総てのものは、かつて聴いたこともなく、その名さえもここには存在しなかった。『尊師よ、もしあなた様が、我々の総ての怖畏を破壊して下さるなら、総て私達は全楞伽島を余すところなくあなた様に差し上げます。ここが好きならあなた様が坐具等をなすことをお望みなら、あなた様はそれを総ておやり下さい』と、彼等満足したものの達総てが、突然にこう述べた。夜叉達の（この）言葉を師はお聞きになって直ぐに申された。『汝夜叉達よ、もし今私にこの島を与えるなら、後の時にわたしは汝達に幸福を与えるであ

ろう。彼等総てのもの達は歓喜して(師を)礼拝して述べた。『尊師よ、尊師よ、あなた様は私達のかくの如き大いなる暗黒を排除して光明を明示し、太陽の光をあまねく放つて、寒さを除去させて、息子や妻達をこのように私達に見せて、死より解放させて下さるでしょう。もし今、あなた様が私達に以前のように生命をお与え下さるならば、この全楞伽島を残りなく与えられ、よく与えられて私達も共にとるでしょう。夜叉や鬼神や鳩槃荼や羅刹等が自分の他のものを排除することが出来ず、またもしかが夜叉の来集を排除しないであろうならば、以前の如く我々が一緒に入ることが出来ず、嫁取りや嫁やりをを行うことが出来ないであろう』と。総ての夜叉達は、かの守護者に宣誓をしようとして、挨拶をした。勝者は彼等の認受した状態を知り給うて、空中より降りて、(夜叉より)与えられた場所に皮の敷具を敷いて、マヒヤンガナ塔の(所に)坐し給うのである。それから守護者、大悲にすぐれたお方は『総ての禍やその暗黒などやまた恐怖の声などあることなかれ』と決意され、『また熱風もまます吹くことなかれ』と(決意)された。それらの雷鳴も暗黒も静まった。以前の通りその夜叉群も互に見ることができ、無病の状態を知って彼等は夫々礼拝をなし、合掌を差しのべて世尊に申し上げた。『あなた様は我々の師であられます。只今より(あなた様の)他にはいかなる依所なるものは楞伽島

には存在しません。あなた様の威力によって、あなた様は我々の帰依所になって下さい。我々のこの寒冷の恐怖を速やかに除去して、今太陽の熱をお与え下さい』と乞うた。(その)言葉を聞き(守護者は)総てに熱を出し給うたので、日中の太陽の熱と同じくらいになった。総ての方向に向って皮の敷具を利那に拡げることが大牟尼は決意なされ『あらゆる方向にわがこの皮の敷具を拡げるさいに、かくの如きわが神通によつて、山や岩や樹木や蔓草やジャングル等の天然のものが、いかなる所においてもこれを妨げることの出来るものは、楞伽島には存在することなかれ』とここに(決意)され、そしてまた『(わが)皮の敷具の熱はあたかも劫転の時の太陽の熱の如くあれかし』と、また『この大地の如く平坦なる皮の敷具はあたかも精製せる銅や金属に水を流した如く、彼等総ての夜叉達に見えるようにあれかし』と、『上方の黒雲や山が燃えたる如き山の入口に行きつつあるものたちには、あたかも柔らかくされた胡麻が散布されたように認められるように』と、『この島に入ろうとする彼等の執著を破ることの出来る恐怖や身の毛のよだつ恐れも無く、他のいかなる障碍もあることなかれ』と、『今また島に住する残りの有情乃至また蟻などにも、どんな恐怖や身の毛のよだつ恐れもあることなかれ』と(決意された)。守護者の決意がなされた総ての一刹那においても、皮の敷具が拡げられつつあるさいに、草も木

も堅き岩石も山なども総てのものが、ことごとくに大地の如き
(平坦)な状態になった。また皮の敷具(の発する)熱は、
劫初における太陽の出現した時の熱と同じであった。その
時、かの皮の敷具は銅やその他の金属が融けると同じくらい
の、またよく熱せられた揚げ鍋や赤熱の炭火の堆積のような
炎熱を発した。島に住む彼等夜叉達は、守護者もなく憐れに
も熾燃⁵⁸²の内につつまれていた。総ての方角を徘徊しても熱せ
られた揚げ鍋や小鉢⁵⁸³や炭火の燂煨を踏みつけつつあると同じ
であった。手足を捉えられて料理する処に投げ入れられて煮
られつつあるようであった。神通による熱によって、夜叉達
には四維の方向にも依処⁵⁸⁵はなく、総てのものはいろいろと観
察した。かの大牟尼は、次第に皮の敷具を拵げつつ、全島を
平坦にしたが、その時彼等夜叉達は、大地と太陽と皮の敷具
とによって、征服⁵⁸⁷せられた夜叉群は身の毛はよだち、大いに
恐れて、水鉢⁵⁸⁸の口の縁を歩きまわりつつある蟻達のように、
大海の縁で(仏陀が)遍く皮の敷具を敷きつつあるのを見
て、楞伽島には明らかに住むべき家はなく、(仏陀によって)
その皮の敷具が拵げられたる場所には、六色⁵⁹⁰の光の華鬘によ
って飾られた世界の救主の、荘嚴された美麗なる身体のみで
あって、その所は仏陀の熱による場所であった。皮の敷具の
この全楞伽島は、師⁵⁹²の身体と等しい大きさであった。師の頭
上の肉髻は梵天に達していた。虚空住の天宮を直ぐに出発

し、総ての天衆は銘々近づき、普ねく⁵⁹⁴捜し求めつつ、礼拝し
つつ合掌をなし香と華鬘と燈明とによって師の供養をなし
た。その⁵⁹⁵の会合には偉大なる神変があった。総ての他の処に
行った夜叉衆もそれを見たのである。全楞伽島の種々に輝き
つつある皮の敷具が、島の縁まで(拵がって)あるのが見ら
れ、仏陀⁵⁹⁷の熱の威力によって、縛せられているようであっ
た。大洋の水は下に行つて、由旬⁵⁹⁸の処では由旬上昇して砂は
虚空に(到り)摩尼の壁が二つ有るようであった。大海は後
に大いなる風によって動き、波や水泡や渦巻や泡の華鬘が、
振動し叫び声を上げて堆積していった。(逃げる)門も見
ることなく夫々逃げまどう総ての夜叉達は、泣き悲泣して
『あゝこの島は、この天王の大偉力に支配⁶⁰²せられ、完全にそ
の手中に入ってしまった。我々は今や十方の何処に(安全を
求めて)行けば、子女等と共に安全健康であるのだろうか。
あゝ我々は何時これ等の恐怖から脱れられるのだろうか。も
しこの大威力ある夜叉が、等至に入るならば、我々総てのも
のは生命の滅尽に到り、あたかも逆風に(舞う)一握りの粃
殻のように吹き散らされるであろう。だから何時、何処に入
って行くべきだろうか。今や我々は生命はない(も同然)な
のだ、だから此処で死んでしまえば海中の生き物達の餌食と
なってしまうであろう』と、総ての夜叉の親族達は、生命の
安息所を失つて、突然大声で泣き叫ぶのであった。かくて世

尊は、全世界を悲心によって（御覧になつて）、共住せる総ての有情達に対しての慈悲の心に打ち震われて、夜叉衆の能力がなく、生命の依処が破壊されたとき、自らの神変による奇蹟によって作られ自らの依処を遍求処において御覧になつた。そして「あゝこれ等総ての夜叉達は、わたしが常に悲心によって世間出世間の導師であることを知っている。わたしは（彼等を）満足させるために、行道を増大させることによる、総てが結合されたのである」と考察し給うた。かくしてその時（世尊は）そのことをお知りになつて、かの夜叉達の住処について觀察されながら、（楞伽島）より東南の方分の処を見給うた。そして緑の若草（の繁つた）心地良い土地、残りの由旬の広さの（土地は）水も十分に具え、池、沼、湖、岩、山、林があり、良き樹木が整理され、あらゆる花々が咲き競い、自然の湖沼には花が咲いて水が充滿し、自生の稲や稗や小麦等の七穀や野菜が豊富にあり、甘蔗も沢山にあつて、更に豊富なターラ、マンゴー、ジャンプ、パンの木、山林檜、蜜果等の樹々や花々に色どられた千由旬の距離の処に存在するギリ島（Giridipa）という島を、世間の導師は御覧になり、（その島は）人間にとつて安穩な処ではないが、夜叉衆にとつては安樂なる（処で）あり、「彼等住しつゝある夜叉達に繁榮があるのであろうし、かの楞伽島に住みつゝある人間達にとつてもまた繁榮の殊に勝ることがあるであらう」と思惟し給うた。この利益を御覧になつた（世尊は）転変を行われた。守護者はこの楞伽島に如何なる転変を行われたのだらうか。千由旬以上も大海の水で隔た処に、南方の鉄圀山を刹那に進めて、自らの威力によって、先に述べられた方法で、このギリ島を徐々に真中に引き寄せ、直ちに強い紐によつて結んで、この島と一緒にして舟のようにして、あたかも雄牛達を軛によつて結びつけて一緒にするようにして、夜叉達の眼を瞬かせた。「このギリ島を総てのもの達は見よ」と（世尊は）心に決意された。（かの世尊は）総ての大いなる暗黒を普ねく破られて、あたかも太陽の昇る時のような時になつた。（夜叉達は）蘇息を得て、師のなされたことを見て、「この島を捨てて、我々は今あの島に止住すべきである」との思いを心に起した。直ちに彼等総てのものはそこに移つた。ギリ島に住するようになった刹那に彼等総てのものは、身体の楽と心の楽とを得た。「あゝこの大偉力ある夜叉は今日来たが、もし此処にこの大偉力ある夜叉が来なかつたら、皮の敷具尼師壇は此処の我々に接近しなかつたであらうし、またギリ島はかの楞伽島に知られない処にあらうと」考察した。彼等のその心を世尊は直接に知り給い、ギリ島に自らの処として止住すべく決意された。（夜叉達は）守護者の語によつて直ちに自らの場所に行つて、ギリ島に止住した。大海の極めて多くの水で千由旬隔つた処における南の

鉄围山に再び行って、一斉に自らの処に一杯となった。「我々の希求したことが完成した」と彼等は思った。満足したものは大喜びに笑いさざめき、彼等は以前の如く星祭りという祭礼を祝った。世尊は邪悪なる夜叉達をことごとく追放し、楞伽島を三度右繞せられ、そこで大護呪 (Mahāparitta) を唱えるべく努め給うた。天、ダヌの子孫 (danava)、キンナラ (kinnara)、乾達婆 (gandabba)、阿修羅等 (asura)、彼等総ての島住のもの達はことごとく来集して、十指を合せて合掌を差し、喜びつつ世界の救主に挨拶をした。護呪を唱え終った世尊は、威力を結束して刹那に、再び以前の坐具の処に来て坐し、直ちに等至に入り給うた。かの(世尊)は、等至より出定して皮の敷具に坐し給うた。その刹那、(世尊は)皮の敷具の火の加持を神通によって縮めて、徐々に元の状態に戻し給うた。龍、天、ダヌの子孫、乾達婆、キンナラ等、その集会において、彼等のために師は法を説き給うた。そこでの勝者の説(法)が終結した時に、多くの有情達は法を領解した。来集せる天達で(三) 帰依と(五) 戒とに立ったものは、数の範囲を超えており数えきれなかった。大スマナ (Mahasumana) と称する天王は、スマナクータ (Sumanakūta) と称する山の頂上での説法の終りに、預流果に達し、かの師の下に信仰に因りて、自ら財貨を供養せんことを乞い願ひ、火威による正法の初道が完成せるときに合

掌をさしのべて礼拝し、このことを申し上げた。『尊師よ、あなた様は今日此処で仏陀の義務を果されました。もしあなた様がかのジャンブディーパにおいでになるとそれ以後、あなた様がおられないために、我々があなた様の下で賞讃し礼拝することが不可能となります。供養さるべき適當なるお品を頂戴することがよろしいかと思ひます。あなた様はかの舍利 (dhātu) をお与え下さいまし』とかの(天王)は懇請した。彼の言葉をお聞きになった全世界の憐愍者、守護者は最も高貴なる肢体を網縵の右手によって摩触され、亜麻の花の(如く)輝やける掌に一杯の量だけ、蜜蜂の翅の色に等しい暗緑色の美しい毛髪を天王にお与えになった。かの(天王)は、それを黄金の筐によって受け取り、師の坐し給うた処に用意され、種々な宝が集積された二つの七宝の珠の上に安置し、(世尊の)毛髪を帝釈青(サファイア)の塔によって覆い、且つ(これを)敬礼したてまつった。世界の救主、十力者、正覚者が般涅槃し給うや、舍利弗 (Śāriputta) の弟子の一人のサラブー (Sarabhu) と称する六神通、大神変を有する長老は、離垢者、大仙人、漏尽者の相弟子達の千人を伴って、かの十力(尊)の火葬堆を右繞しつつ、師の頸骨舍利 (gīvatīdhātu) を、神通によって火炎を鎮めた旃檀木の火葬堆に手を入れて執って、(比丘達と)共に空中に躍進し、比丘達を伴いマヒヤンガナ廟(の中)に安置し、シンバリ

(Simbali) とスマナ (Sumana) と称するこれら二人の若き沙弥達をもって、頸骨舍利を覆い、神通力によってナーガの都よりもたらされた脂肪色 (medavaṇṇa) の岩によってサフアアの宝珠の塔をすっかり覆わせ、十二肘の高さの (塔) を作らしめてマハースマナ天王に与え、クシナーラ (Kusināra) に去って行った。師の涅槃より二百年と更に三十五年が過ぎで、大マヒンダ (Mahamahinda) 長老 (により) 楞伽島 (が) 明浄ならしめられたときムタシーワ (Mutasiya) 王のウッダチュローバヤ (Uddhacūḷabhaya) と名づける大福德 (を具えた) (王) 子は、その地を清浄にして精舎を拜し、彼が人々の群によって大いなる恭敬がなされたとき、多くの漏尽者達や多くの竜、乾達婆、天などにより見られつつあった塔廟を見て、夜にその塔廟で五種の楽器の如き妙なる音色を聞いて、希有なることの起ったことを喜び、その不思議な脂肪色の石の塔を煉瓦によって覆わせて、三十肘の量の高さに (建てしめた)。

その後カーカワンナティッサ (Kakavaṇṇatissa) 王のドゥッタガーマニ (Dutthagāmaṇi) と称する大福德あり大光輝ある一人の (王) 子は、教法の光輝のためにダミラ (Damilā) 人を撃破して、楞伽 (島) における君主、最上の王となった。そして人王は四軍の将と共に再び行って、適意のその場所に順次に到って、マヒガナの地域に厚き保護を確立させ、

その塔廟について言われたことを聞いて行って礼拝をなし、これに八十肘の高さの覆蓋塔を作らしめた。このマヒヤンガナ塔は、かくの如くして建立された。この島をかくの如く人間 (の住居) に適しいものとなして、自在者、勝れた勇者、精進の智者は、ウルウェーラ (Uruvelā) へと去り給うた。マヒヤンガナの来臨終る。

大慈悲者にして師であり、一切の有情を利益することを喜び給える勝者は、成道より第五年にジェータ林に住しつつ、マホーダラ (Mahodara) 竜とチュローダラ (Cūḷodara) 竜の叔父、甥達並びに (彼等の) 家来達の間、摩尼珠の座牀に関して、戦いの起りたるを見そなわして、正覚者は、チッタ月 (Cittamāsa) の黒分の (十四日の) 布薩 (uposatha) の早朝に、最勝の鉢と衣とを携え、竜達への憐愍から、ナーガ島 (nāgadiipa) に来たり給うた。かのマホーダラ竜は、その時五百由旬の海中の竜界における王であり、大神通を有していた。彼の妹である少女は、ワッダマーナ (Vaddhamāna) 山の竜王に与えられていた。チュローダラはかの女の息子であった。彼の母方の祖父 (なる竜王) は、(チュローダラの) 母に最上の摩尼珠の座牀を与えて死んだ。それ故に叔父とその甥との戦いは起った。山に住むかの竜達もまた大神通を有していた。サミディスマナ (Samiddhisumana) と名づく天は、ジェータ林に立っている己れの麗しき住处であ

るラージャーヤタナ樹を携え、サファイヤの山の頂きを執つて心満足し、仏陀⁶⁹⁰の許しを得て、恰も傘蓋の如く、勝者の(頭)上にかざしつつ、かのもと住みたりしところ⁶⁹¹に赴いた。かの天は直ぐ前の生では、ナーガディーパにて人間であったが、彼はラージャーヤタナ樹の立っている場所で、辟支仏⁶⁹² (Paṇḍita) (Paccekabuddha) の食事しているのを見ていた。見終つて心に浄心を起し、鉢を浄める(ために) その(辟支仏)に枝を施した。それによって彼は、その心地よきジェータ園の樹に再生したのである。その(樹)は後には門屋の傍に外側にあった。天中の天たる(仏陀)は、その天子の繁栄を見そなわし、樹と共にかの天をナーガディーパ(の利益のため)に連れておいでになった。

導師⁶⁹³はその戦の最中に、中空に坐し、黒闇を攘いつつ、彼等竜族達(の上に)恐ろしき(黒闇を)起し給うた。恐怖⁶⁹⁴に悩める彼等を慰めつつ、光明を現わし給うた。彼等(竜達)は善逝を見て歓喜し、師の両足を礼拝し奉った。勝者⁶⁹⁵は彼等に和合をなすことの法を説き給うや、彼等は雙方共にまた喜び、かの牟尼尊に、その座牀を捧げた。師⁶⁹⁶は地上に降り其処にある座牀に坐し給い、竜王等の(奉げた)天上の飲食によって満足し給い、導師は彼等水住、陸住の曲行者等八億を(三)帰と五戒とに安立せしめ給うた。マホーダラ竜の叔父なるカリヤーニ(Kalyāṇi)の摩尼眼竜王は戦をなすために、

其処に行ったが、善逝⁷⁰¹、守護者を見て正法の説示を聞き、(三)帰と(五)戒に住し、其処で如来に請いたてまつりて(申すには)『世⁷⁰²の)守護者よ、あなた様は我等にこの大慈悲をなし給うた。あなた様ももし御来臨なさらなかつたら、我等総ては灰尽に帰したでありましょう。大慈悲者よ、哀愍を私にも彼等個々のものにもお示し下さい。再びここなる私の棲地において給わんことを』と。世尊⁷⁰⁴は黙然として、ここに來るべきことを諾し給い、その処にラージャーヤタナ聖樹を植え給うた。世⁷⁰⁵の守護者はそのラージャーヤタナ(樹)と高価な座牀とを礼拝するようにと竜王達に与えて(宣うに)『竜王等よ、私の受用物の祠を礼敬するがよい。諸子よ、それは汝等の利益と安樂のためになるであろう』と。善逝⁷⁰⁷はこの如きを始めとして、竜王等に訓誡をお与えになり、一切世間の憐愍者は、ジェータ林に去り給うたのである。

ナーガディーパの來臨終る。

それより第三年目に、かのマニアッキカ(摩尼眼)竜王⁷⁰⁸⁽¹⁵⁾は僧伽と共なる正覚者に近づき(供養に)招請し奉った。成道後第八年目にジェータ林に住しつつあった勝者、守護者は五百人の比丘に圍繞せられていたが、勝者⁷¹⁰、聖者の主は、第二日に食事(の時刻)が報ぜられた時、美しきウエーサーカ(Vesākha)月の満月の日に、その処⁷¹¹にあって僧伽梨(saṅghati)を着け、鉢を携え、カリヤーニ地方のかのマニアッ

キカの住いに来たり給うた。カリヤーニ祠の所に作られた宝珠の仮堂(の中)の高価なる座牀に(比丘)衆と共に入り給うた。天の堅軟の食物をもって、群を率いた竜王は、心喜び、群を率いた勝者、法王を満足せしめ奉った。其の処にて世間の哀憐者である師は法を説かれて後、スマナの峰に登って、足跡を印し給うた。その山の麓において(比丘)衆と共に心のままに食後の休息をなして、長池(Diḡhāvāpin)に赴き給うた。時に有情等の利益の根拠たる守護者は、(後世)塔廟(の建立されるべき)処において、僧伽と共に坐し、定に入り給うた。場所の適不適を熟知せる大聖は、そこから起つて(後の)マハーメーガ(Mahāmegha)林園に赴き給うた。守護者は弟子達と共に大菩提樹の(移植せられた)場所に坐して禅定に入り、大塔の(建立せられた)所においても同じく(禅定に入り給うた)。トゥーパ(Thūpa)園の(後に)塔の建てられたところにおいても同じく禅定に入り給うたが、(それより)その定より出でてシラー(Sīla)靈祠の場所に(赴き給い)、師は諸天の群を伴いて教えを垂れ給い、一切智の道を踏み給うた仏陀は、それよりシェータ林に還り給うた。かくて無量智の守護者は、楞伽(島)の将来の利益を見そなわせられ、楞伽(島)の阿修羅、竜群、その他のもの達の現在の利益をも知り給うて、大慈悲の世間の燈明者は、美しいこの島を三度訪れ給い、これによりこの島は、(正)

法の燈明に輝き、善人に尊敬せられるに至った。

カリヤーニーの来臨終る。

以上、善人の淨心と感謝のために作られし大王統史中の「如来の来臨」と名づくる第一章。

第二章

劫初に、マハーサンマタ(Mahāsammata)と称する王があり、実に大聖は(この)マハーサンマタ王の種姓に属し給うのである。ロージャ²(Roja)とワラロージャ(Vararoja)と同じく二人のカリヤーナカ(Kalyāṇaka)ウポーサタ(Uposatha)マンダータ(Mandhata)二人のチャカラ(Cakara)ウパチャカラ(Upacakara)チェーティヤ(Cetiya)ムチャラ(Mucala)とマンームチャラ(Mahā-mucala)と名づくる王¹ムチャリンダ(Mucalinda)サーガラ(Sagara)とサーガラデーワ(Sāgaradeva)と称する王⁴バラタ(Bharata)バギーラタ(Bhagiratha)ルチと(Ruci)スルチ(Suruci)パターパ(Patāpa)マハーパターパ(Mahāpatāpa)同じく二人のパナーダ(Panāda)ス⁵ダッサナ(Sudassana)とネール(Neru)とも同じく二人ずつ、アッチマー(Acchima)と(これ等)王達は彼の(マハーサンマタ王)の子孫であり、この二十八王の寿命は不可測であり、クサーワティ(Kuāsvati)ラージャガハ(Rāja-

gaha) ミティラー (Mithila) (城) とに住していた。それより百人の王の授名は不明であるが、榕樹の小枝 (が茂れるように) 自己の系統の相続の系譜を維持しつつ、王国を統治した。彼等諸王中で最後の (王に) アリンダマ (Arindama) と称するものがいたが、かのアリンダマの王の子孫達はアユッジャ (Ayujha) 城という王国を支配していた。かの数えられる王達は総てで五十六人いた。五十六人 (の王の中) 最後のドゥッパサハ (Duppasaha) と称する (王) は、死んだ。かの王の子孫の相承は六十人の王があり、彼等は賢明で大力があり、¹²バーラーナシー (Barānāsī) と称する都において王国を統治した。六十人の諸王の中最後のアジタ (Ajita) 王と名づける王の子孫の相承は八万四千人を数えるが、その時、¹⁴カピラ (Kapila) と称する都において、王国を統治していた。

註

- (1) 以下第四八五偈までの Mahānāgavana に亘る記述は Mhv. Tikā (72. 12-73. 5) と殆んど内容的には同じである。
- (2) 第四九六偈から六一二偈までは、仏陀が夜叉の集會に飛来し種々の神変を示して夜叉を征服する様を述べている。Mhv. では第二三—二四偈の短い箇所を単に「……空中に立たるらしし雨風、黒闇等によりて彼等を激動せしめたり」(…*thā-*
ne vehāyasari thito vutthivātandhakārādiṃ tesamsa-
ivejanam akā) と記してあるだけだが、Extended Mhv.

「Extended (or Cambodian) Mahāvamsa」訳註③ (福田)

では Mhv. Tikā (73. 26-80. 3) の記述の引用によって縷々その状況を記述している。

- (3) 六〇三—六〇五偈までの記述の内容は、一部 Dpv. I 63-64 の箇所と似ている。
- (4) 六一二偈—六一〇偈ではギリ島についての記述が主体であるが、Mhv. ではギリ島についてはただ三〇偈に「守護者は心地よきギリディーバを彼等の方に引きよせ……」(*Giriḍi-*
pati tato nātho rammaṃ tesam idhānāyi...) とあるのみである。Dpv. I 66-69 には少しく詳しい記述があるが、Extended Mhv. の右の箇所は Mhv. Tikā (80. 5-80. 17) の部分と似ている。
- (5) 六二二偈—六四三偈には、神通力によって仏陀がギリディーバを引き寄せ夜叉達をその島に移動させた上、また元の海上の彼方へ戻し、更に夜叉達のいなくなったランカーを守護するためパリッタを唱えるまでの経過を述べている。この部分は Mhv. Tikā (80. 18-81. 16) の箇所と内容的には殆んど同じ。
- (6) 六三八偈は Dvp. I. 78 の記述と多少似ている。
- (7) 六四六偈—六五七偈では、仏陀が諸天、竜、ダマの子孫、乾達婆等に説法し、次いでマハースマナ天王に法を説示し、彼が預流果に達した後ジャンプディーバに還らんとした仏陀は、彼の懇請によって一握の毛髪を礼拝の対象として与えたという伝説を語る。この部分は Mhv. 31-36 に相当するが、Mhv. Tikā (95. 16-98. 11) の詩形と殆んど同じである。
- (8) 六五九偈—六八〇偈では舍利弗の弟子の Sarabhu が仏陀

の火葬堆から神通力をもって仏陀の頸骨を受取りセイロン島にもたらし、マヒヤンガナ塔廟に安置し、その後ウッタチャラーバヤ王、次いでドウッタガーマニー王等によって修造されていく過程を述べている。この箇所は Mhv. では三七—四三偈の部分であり、Mhv. Tikā の 98. 24-100. 28 に相当する。

(9) 脂肪色の石 medavaṇṇapāsāna は Mhv. の TEXT (Geiger) の note では meghavaṇṇa — (雲色の—) としても出ている。

(10) ダミラ (Damila) 人は、即ちタミール人のことである。かなり古い時代からセイロン島に移り住み、そのため各時代の王にしばしば撃退されていた。特に此処ではドウッタガーマニー王の征服が記載されている。この時のダミラ人の首領はエラーラ (Ejāra) であったというが、その他にセーナ、グッタ、プラハッタ、ワトゥッカ、などの名が史書に出ている。尚、分別論註 (Vibh. A. p. 388) ではこのダミラ人の言語を、非ブリーアン語十八の一つに含めている。(Tattha sesā Oṭṭa-Kirata-Andhaka-Yonaka-Damīlabhāsādikā atthārāsa bhāsā parivattanti, ayam ev'ekā yathābhucca-brahm-avohāra-ariyavohārasankhātā Māgadhahāsā na parivattati.)

(11) 六八一—偈七〇七偈は、Mhv. 44-70 の偈に殆んど一致している。この箇所では仏陀の伝説上の第二回目の来臨を述べたものであるが、Mhv. Tikā 101. 9-111. 5 の部分に相当する。ただ、Mhv. Tikā では Mahodara 竜王の妹の名

を Tiracchikā と記しているが、この名は Mhv. でも Extended Mhv. でも出っていない。

(12) Mhv. では Kañhāvaddhamānamhi pabbate とあるが、Extended Mhv. では kañña Vaddhamānamhi pabbate とあり、kañña はその前語の kanīṭṭhikā と同格である。従って「妹である少女は」となり、山名は単に Vaddhamāna pabbata とする。これは Mhv. Tikā が「山名は単に Vaddhamāna」としていることに依る。

(13) Extended Mhv. の「…kalam akāsi ti」は Mhv. では「kalakato nāgo」となっている。

(14) Mhv. では「この所を利益し給わんが為に、樹と共に彼をも伴い給えり (idantṭhānāhitattān ca taṇṇi sarukkhaṇi idhānāyi.)」となっている。

(15) 七〇八偈—七二〇偈までは Mhv. 71-83 と殆んど同内容であるが、ところどころ語句が多少異なる箇所もある。

(16) 本章はマナーサンマタの王統を述べたものであり、Mhv. では同じく第二章で三十三偈からなる。今回掲載分では、第七偈上の始めの部分までが Mhv. と殆んど同内容であるが、王名、都城名が、具体的に記述されており、この部分は Dpv. の記述と内容的には似ている。

(17) 二人のカリヤーナカ (Kalyāṇaka duve) とは Kalyāṇa と Varakalyāṇa のことである。(cf. Dpv. III 3)

(18) Mhv. では Angrasa とあるが、Dpv. III 5 では Bha-girasa となっている。

(19) 同じく二人のパンナータ (Panāda ca tathā duve) とは

Panāda Mahāpanāda ㄅㄨㄢㄨㄛˊ ㄇㄞˊ ㄆㄢㄨㄛˊ ㄇㄞˊ ㄆㄢㄨㄛˊ。 (cf. Dpv. III 7)

(20) ㄅㄨㄢㄨㄛˊ ㄇㄞˊ ㄆㄢㄨㄛˊ Dpv. I, 14 ㄅㄨㄢㄨㄛˊ ㄇㄞˊ ㄆㄢㄨㄛˊ

(21) cf. Dpv. I, 15

Dpv. I, 16 ㄅㄨㄢㄨㄛˊ ㄇㄞˊ ㄆㄢㄨㄛˊ ㄇㄞˊ ㄆㄢㄨㄛˊ Aññāna ㄅㄨㄢㄨㄛˊ ㄇㄞˊ ㄆㄢㄨㄛˊ。